

# 仏様のおはなし新シリーズ第107集「聞法十六年」

今から百年ほど前、大阪の大実業家であつた田附政次郎（たづけまさじろう）さんがフトとした動機で「おれはどうなるのか」と自己が問題となり、それから約十六年間、津村別院のお朝事のご縁に、毎朝お参りされました。しかし、十六年目にフト驚きが起ります。それは、十六年間も熱心に参りながら、まだ阿弥陀様の本願に出遇えていない、お呼び声が聞こえていないと気づき深く反省をされたのです。そして、参りながらなぜ遇えないか、聞きながら、なぜ聞こえぬか、何か欠点があるのでなかろうか？と。

政次郎さんは、当時名高い行信教校（ぎょうしんきょうこう）設立者・利井鮮妙（かがいせんみょう）和上と出会い、その苦悩を明かします。

〔：政次郎と言つたな。政次郎、何年聞いたか〕

〔十六年間お聞かせに預かりました。〕

〔たつた一声で間に合う呼び声を、十六年間何を聞いておつた？〕

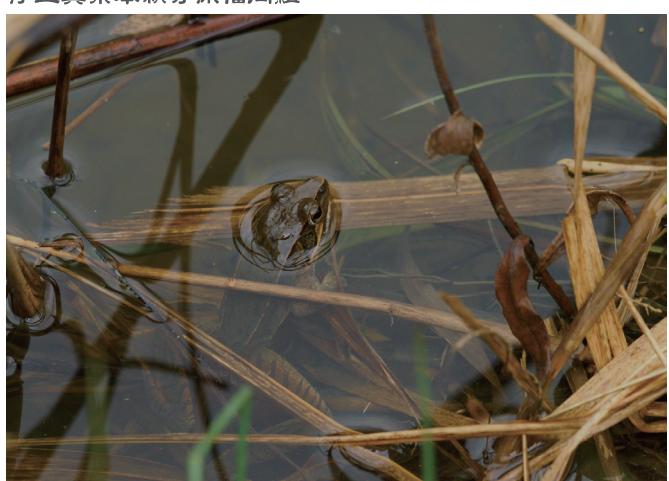
〔なんと鋭い一言でしよう。〕

「阿弥陀様のお慈悲が届いたら、これで大丈夫・間違いないというハッキリしたものを持りたい。信前信後の水際をハッキリ知りたい、掴みたいと長い間聴きましたが、にぎれも掴めもしないので、悩んでおります。」

「なあ政次郎、今度のお助けはお呼び声じゃぞ。声が握れてたまるか、声が掴めてたまるか、声は唯聞く一つ！なあ政次郎、津村別院には偉いお方がお出でになるが、名前を言うてみい。」

政次郎さんが、お聴聞に預かつた数々の和上様方の名前を申し上げると、吐き捨てるような口調で

「くだらん。なぜ実所（みどころ）を食べないので。なあ政次郎、A 劝学がお前のために犠牲になつたとか、お前のためにB 和上が身代わりに立つという話があつたか。お前のために犠牲にも身代わりにもなつていよいよ方々は、お前を救う力はないぞ。衆生のために全身全靈を投げ打つてくださつたお方は、法蔵菩薩ただ一人！政次郎、この法蔵菩薩の願心を頂かなければ、お助けには遇わないんだぞ。」と諭されたといいます。聴聞を第一とする真宗の念佛者として、今でも心打たれるお話をです。



福岡組 検索